

娘の死

出来ることならば「時」を逆転させて四月三十日の夜まで引き返したい。神仏と言わず魔物の力を借りてでも、出来ることなら、出来ることなら。

三十日の夜なら、まだ間に合う。

五月一日になっても暗いうちならまだ間に合う。

五月一日の朝、十六歳の末娘が、前夜からの喘息発作で苦しみ通した挙句、死んだ。

私は娘の苦しみを軽くみて、いつものことだからと吸入薬を与えただけで、ある老人病院の宿直に来ていた。前日も前夜も診てやることさえしないで。

何たる親だったか。

三十日の朝、今春入学した高校の制服を着て食卓に就いている娘と一度顔を見合わせただけで、声もかけてやらずに出勤して来てしまった。それが最後になった。

二階の寝室で添い寝してやっていた妻がいつもとは違う発作の激しさに心配して、階下の電話から老人病院の私の所に、夜が明けたら私の勤務先の総合病院に入院させようとの相談をして来たのが五時頃だったろうか。いつも仕事先への電話を嫌う私に遠慮して、おろおろしながら明るくなるのを待っていたのであろう。その間に娘は起き上がったらしい。異様な物音に妻が階上に駆け上がったと娘は洗面所の前で昏倒していたという。

再度かかって来た電話の、今まで聞いた事のない半狂乱の妻の絶叫にどう対応したか覚えがない。落ち着け落ち着けと怒鳴っていただけのような気がする。即刻救急車を頼め、〇病院に直行しろ、長男が乗って帰っている私の車を直ぐ迎えによこせ・・・。

恐ろしい予感でした。もう間に合わないという焦慮から胸騒ぎ以上の、絶望の。

何度も時計を見たが時刻の記憶はない。たぶん六時頃だったか。明るくなった当直ベッドのシーツを握り締めて迎えの車を待つ、早く早く。上着を引っ掛けながら飛び出してきた宿直の警備員に玄関の鍵を開けて貰いながら、その背中に、もう間に合わないかもしれないんだ、なんとかしてくれないだろうか、なんとかしてと無言で、しかし必死に訴えていた。

呼吸停止したら六分間が生死を分ける、もうその何倍かの時間が経ってしまったが、なんとかならないか・・・。

国道1号、影取のあたりの楠並木の若葉に朝日が当たってキラキラしていたのが忘れら

れない。

自分の気持ちとは裏腹に、外界はあまりにも明るく、上りの車線はもういつもの出勤渋滞だった。たぶん三十分以上かかって勤務先の病院に走りこんだ時には、一足先に救急車で運び込まれた娘にアルバイト当直のＴ先生が気管内挿管をしてくれたところだった。怖れていたように心電図は直線だった。

間に合わなかったという絶望が気持ちの全部を占めたようで、心マッサージもなんだか宙に浮いたようにオザナリにしたような気がする。もっと長く、一時間以上はやってやるべきだった。いい加減に手を止めるぐらいだったら、開胸心マッサージをするために止めるべきだった。諦めるならきっちり理詰めを考えてから、手を止めるべきだった。痛切にそう思う。が、何も出来なかった。

大学に帰らなくてはならないＴ先生に、いつまでも酸素バッグを押し置いて貰うわけにはいかない。それにまもなく皆出勤して来て、いつものように外来の診療が始まる。動き出した病院の日常の邪魔をしてはいけない。この救急処置室もいつまでも使うわけにはいかない。いい加減には空けなくてはいけない。妻の電話以来二時間は経っているのじやないか、万が一蘇生したとしても植物状態必発だろう、諦めた方がいいのではないか。

が、諦めるべきではなかった。まわりに気兼ねしていい加減に諦める場合ではなかった。蘇生処置をもっともつと続けていれば、いや、思い切って開胸心マッサージをやっていれば、娘は生き返ったかもしれない、という繰り言をあれ以来何度繰り返したことがあるか。

前夜のうちに一度でも診てやっていれば……。発作がこんなに急激に酷くなるとは思わなかったのではあるが、妻からの連絡もあまりに遅かった。また私の認識もアマかった。娘は年に何度か風邪を引いて喘息様の呼吸苦を起こすことはあったが、気管支拡張剤の吸入で収まるという程度で、死に到るような重篤な重積発作になるとは思いもしなかった。私のこの程度の認識、先入観では前夜に娘を診たとしても事態を予測出来なかったかもしれない。しかし、そうしなければならなかったのだ。

長男が夜、ドライブに車を使いたいというので四月三十日の夕方、勤務先の病院に車を取りに来たので老人病院まで送らせた時、病院に直行しないで自宅に寄って私が娘を診てやるべきだった。定刻の六時にいくばくか遅れたとしても、誰の迷惑にもならなかった筈である。

丁度二週間経った今、重い石を抱いたような悲痛な想い、居ても立ってもいられない悔恨は続く。通夜、葬式とその始末、一昨日から再開せざるを得なかった勤務などどうにかやった。どうにか。

悲しみは時と共に薄らぐ。しかし娘に死に到るまで喘息の苦しみを我慢させた親としての罪、そしてまた蘇生が可能だったかもしれない（そう考えると本当に堪らないけれど）のに、自分が虚脱してしまって措置を中途半端に諦めた医者としての罪はどうにも償いよ

うがない。この償いようが無いという悔恨は日毎に強くなる。

時間は逆転出来ないものか。四月三十日の夜まで逆転出来ないものか。そうすればまだ間に合うのに。

(五時通信 第一二八号 一九八六年六月十日)